

「口演童話」関係資料収集・公開プロジェクト

利用音源：古村覺氏録音／所蔵音源

●久留島武彦翁の口演● デモクラシーのお話（下）

【はじめに】 武彦翁がまいた「夢のタネ」、武彦翁や口演童話の関係資料・情報があればご一報を

■ 今から半世紀前、日本各地を口演童話を語り「夢のタネ」を子供の心に蒔いて歩いた、お話の上手なおじさんがいました。明治大正昭和と日本にとって厳しく悲しい時代に「子供こそが次の世代の宝である」の信念のもと、児童文化の発展に尽くした口演童話家、それが久留島武彦です。

■ 口演童話とは子供たちを前に童話を語る児童文化の一つで、

今日盛んな絵本の読み聞かせとは違い、口演者（語り部）は身ぶり・手ぶりと言術だけで聴衆をひきつけなくてはなりません。対象は子供たちなので、年齢層・時季・会場・地域などの条件によって、話し方には変化が生じます。

■ このため、翁本来の足跡を知る方法は、活字化された講演録や伝記に加え、録音された“声の響き”に触れる必要が求められます。

明治末期から昭和 30 年代にかけて、全国のこどもたちを魅了したその話術の片鱗を、このデジタルブックでお楽しみ下さい。

■ 久留島武彦倶楽部では、書物では表現することが難しい口演童話における『声や響き、言葉の間』の大切さを知ってもらうため、武彦翁本人の肉声をデジタル化する事業を進めており、さらなる音声資料デジタル化をめざし口演童話関係の資料を収集しています。資料や情報があったら当倶楽部にお寄せ下さい（連絡先は巻末に記載）。みんなで後世に残るデジタル資料を充実させていきましょう。

久留島武彦倶楽部 主宰 桑野 英司

【口演の聞き方】 次ページ以降、ページ左下にON、OFFボタンがあるページでボタンをクリックすると、音声の再生・停止ができます。最初にONボタンを押すと「マルチメディアコンテンツに関する信頼性を管理」という画面が立ち上がります。内容を確認した上で、その画面にある「再生」ボタンを押してください。音声の再生が始まります。

（音の大きさは、パソコン本体の「音量調整」で行って下さい）

(資料：到津の森公園)

「デモクラシーの話」の背景

■昭和 27 (1952) 年、北九州の到津遊園 (いとうづ ゆうえん、現「到津の森公園」) を舞台に開かれた「北九州地区幼稚園大会」で、園児たちを前に久留島武彦翁が行った口演が、この「デモクラシーの話」。デモクラシーという大人でもなかなか理解できない概念を、カラスさんやネズミさんなどが互いの力を活かし、力を合わせて頑張る物語りを通して面白おかしく、子供たちをぐいぐい引き込みながら語りかけている。到津遊園の古村覺氏がオーブンリールテープに録音した。

久留島翁 (左) と村上巧児氏 (右)



林間学園で子どもたちを前に語る久留島翁

■到津遊園は西鉄の前身、九州電気軌道が昭和 7 (1932) 年に開園した。後に西鉄の初代社長となった村上巧児氏が久留島翁と同じ大分県の出身で子供の頃から知り合いだった縁で、昭和 12 (1937) 年から、久留島翁を初代学園長とする林間学園をスタートさせた。林間学園は今なお続き、久留島翁らの思いが連綿と引き継がれている。

到津の森公園 (旧到津遊園)：福岡県北九州市小倉北区上到津 4 - 1 - 8

■デモクラシーの話（下）

（前回の話）

カラスはうれしかった。いちどきに、お友だちが三匹。

「じゃあ、まあ明日の朝は早くやってみましょう。シカさんも早くおいでよ」

そうするとシカは

「ワシは何か怖いようだ。まだそこいらにお百姓さんがおったらば、うたれるかもしれんから、先に帰りますぜ。じゃあ、さようなら、さようなら、さようなら」

足が長いから、チョイチョイチョーイと飛んで帰った。

カラスは「さよならー、さよならー、さよならー」

ネズミは「さよなら、さよなら、さよなら、さよなら、さよなら」

カメは〇〇だから頭を下げながら「さよならー、さよならー」もぐって一晩たって翌朝、



早〜く池のそばに来たのは、誰が来たでしょう。

誰だと思います？ えっ

シカが来ない、いつまでたっても。ネズミもまだ来ない。カメは土の中に頭を突っ込んで眠っておったから、お日様の上がったことを知らなかった。

カラスが「カア、カア。お寝坊さんだなあ。みんなまだ来ないなあ」

「カメさん、カメさん、どこにおるんだい。ちっとも訳が分からんなあ。カメさ〜ん」

そうするとカメは泥の中から頭を出して

「うう〜ん、うう〜ん、う〜う、あ〜、カラスさん、もうお日様はあがったか？」

「お日様はあがったかもしれないもんだ。もう東の山の上に高〜くおあがりになっておる。さあ、起きた起きた」

「カメさんはうらやましいなあ。水道のところまで行かずとも、オマエ池の中だから金ダライ持ってこずとも顔が洗えるなあ」

そうするとカメは

「ワシは泥の中へ頭を突っ込んでおるから、よ〜っぽどよう洗わんと、う〜ん目が見えない」

「あっ、そうだ。今日はシカさんも来るんだな。みんなが来るんだな、ネズミさんも」

そういうたときに、

ネズミが向こうから体中をネズミ色にしてチョロチョロチョロチョロと飛んできた。

「ちょいとカメさん、大変だよ、大変だよ。カラスさん、大変なことができたんだよ」

「どう、どうしたの、何したの」

「あのね、私あの、あの原っぱの中とんでくる??? 人間というヤツはろくなことを考えない。

原っぱの中に落とし穴をこさえて、

シカさんが山から出てくる道で落とし穴の中にバカーッと踏み込んだ。

仰向けにひっくり返った。

ノドとおなかを大きな綱でしばられて、動けば動くほど締め付けられて、死にかけておる。

私はどうしたらいいかと思って、飛んできた」

そうするとカラスが「まあネズミ、オマエはなんていうバカだい」

「な、な、なんでバカだい」

『なんでバカだい』って、オマエ、その強い歯でなぜ綱を切ってやらないんだ」

「あっ・・・あんまりびっくりしたらオレ、歯のあることを忘れちゃったんだよ」

「バ～カだなあ。自分が持っとして忘れるヤツがあるか。それで切ってやればいいのに。

じゃ、早く行け、早く行け」

「それなら行って綱を切ってきましょう」

ネズミが飛んでいこうとするとカラスが

「ちょっと待て、ちょっと待て、お前が飛んでいくより、オレが連れて行ったほうが早い」

「エッ。オマエどうして連れて行くの？」

「お前のシッポをくわえて、ぶら下げていきゃ早いじゃない」

「ハハア、アハハ、そうか。じゃあな、痛くないようにくわえてくれろよ」

「友だちのためだ。少しぐらい我慢せい」

大きくくちばしを出して、ネズミのシッポの先をひょいっとくわえて

ネズミは「痛い、痛い。痛い、痛い、痛い」

「我慢せい。我慢せい」。パサッ、パサッ、パサッ、パサッ・・・。

そうするとネズミは逆さまになってブラブラブラブラ～っ・・・

グ～ッと持っていかれると、下からカメが頭を出して
「オレもシッポがあるから、カラスさん、ついでにくわえていってくれろよ～」といった。

そうするとネズミは逆さまになって、
「オマエは重たいからダメだよ～。オマエは待っといで、待っといで」
ズ～ッとくわえて持って行かれた。

穴のそばまで行ったカラスは、シカの耳元にネズミをぽとりと落とした。
「早くせいよ、早くせいよ。お百姓さんが来たら、オレはカアカアと鳴くから」

それからネズミは一生懸命、シカのノドをくくっておった綱をチクチクチクチク、チクチクチクチク・・・「あー痛いや」・・・チクチクチクチク・・・

「シカさん、もう少しだから我慢せい。もう少しだから我慢せい」

シカは「ヒ～、ヒ～、あ～苦しい、あ～苦しい」

「もっと、もっと、もっと我慢せい、我慢せい」・・・チクチクチクチク。
ぶつ〜りと切ると、おなかを縛った綱だけ。

「ええか、今度はお腹だぜ、お腹だぜ」・・・チクチクチクチク

ぶつ〜りと切ったとき、カラスが「カア、カア、お百姓さんが来たぞ、早く逃げろ」というと、シカはくるりと立ち直ると穴からグ〜イッと飛び出した。

それを見るとカラスも、もうよいと思ったから「カア、カア、カア、カア」。シカの背中の上を飛んでいく。

ネズミも安心して、穴の底からピョ〜イと飛び出すと、バ〜ンと頭をぶつけた。
「ワー、痛い。あー、目から火が出た。あ〜痛かった」。何だろうと思ってヒョイッと見ると、それはカメがそこまで這って来た。カメの甲羅にバーンとネズミは頭をぶつけた。

「痛いじゃないかよ、痛いじゃないか」。

そうするとカメさんは、「おい、シカさんはどうした。シカさんはどうした」

「シカさんはオマエの背中を飛び越えて、もう池のそばに帰っているぜ。オマエは食べられるカメだから、そんなところでマゴマゴしていると・・・

あ、ああ、あ、お百姓さんが来た。早く、早く土の中に隠れろ、土の中に隠れろ」

そうするとカメさんはあわてて「それは大変だよ、それは大変だよ、それは大変だよ」ガサガサガサガサするが、なかなか土の中に入れない。

その間にネズミは一生懸命、飛んで池のそばまで帰ってくると、シカさんが「ネズミさん、本当におかげで助かって。ありがとう。カラスさん、本当にありがとう」

「シカさん」

「はあ」・・・「おい、・・・おい、カメは、カメは、カメさんはどこ行った」

そうすると「カメはなあ、オマエを助けようというので、あの穴のそばまで来たんだ。わたしゃバーンと飛び出して、ここをバーンとぶつけた。だからこんなコブが出た。だけど、あれは食べられるカメだからなあ。あれは、ひょっとするとお百姓さんが持っていきゃせんだろうか」

そういうとシカさんは、「それは困った。私が助かってカメさんがとられたら、私は義理が悪い。これは何とかして助けてあげにゃならん。カラスさん、ちょっと行ってきて見てきてください」

カラスが「そうそう、心配するより行った方が早い。カア、カア、カア、カア・・・」。駆けつけていってみると、カメは縦横十文字にくくられて、お百姓さんの背中にぶら下がっておる。

「ああ、ああ。頭もシッポも出すことができずに・・・。これは何とかして助けなければならん」
と思ったから、飛んで池のそばまで来て、
「おい、カメさんがやられた。カメさんがやられたんだ」

そうするとシカが「あー、困ったなあ。カメさんが取られてしまったらワシはこうしておれない」・・・「あっ、ちょいと、カラスさん、ちょいと耳を貸してくれろよ。カラスさん」

「えっ、何？ えっ、何だ？ えっ、うん、うんううん、あはあ、あはは、ははあ、それはいい、それはいい。ちょっとネズミさん、耳を貸して」
「えっ、うん、うんううん、あーああ、それはいいなあ」

皆さんに聞こえましたか？

何だか三匹で相談をして、カラスもネズミもシカもお百姓さんの後を追っかけて、お百姓さんはもう一町ばかりで自分のおうちのところに帰れると思って、ひょっと見ると、桑畑の中にシカが仰向けにひっくり返って倒れておる。

そのシカの角にカラスがとまって、シカの目の玉をこう狙って、突っかけている。

が、シカは「はあ・・・はあ」大きな息をしながら、起きることができない様子。カラスは一生懸命にシカの目の玉をくちばしで突付きかけている。

それをお百姓さんが見ると「あっ、こいつはうまいぞ～。ははあ、シカがあのだから逃げてあすこまで来たが、もう精も魂も尽きて倒れたんだ。こいつをカラスが見つけて目の玉から食にかけているな。だれがカラスなんかになんかに食わせてやるかい。オレがつかまえてやろう」。

そーっと四つんばいになってシカの後ろまで行く。もう 1 メートルくらいだと思ったから「やっ」と飛びついて抑えようとする、

いつか逃げたカラスがお百姓さんの後ろ頭のところにきて「カアーッ」といった。

お百姓さんはビ〜クリして、ひょいと手を離したとき、シカがひょいと立って

ヒョロヒョロヒョロヒョロ・・・20 メートルほど向こうに行って、パターンと倒れた。

「あー、びっくりした。今度こそ」といって、ひょいとかまえようとする、
左の後ろ頭をカラスがくちばしでコツーンとどつく。「あ〜痛い」。

シカはヒョロヒョロヒョロヒョロと立って、パターッと倒れる。
もう捕まえるか、もう捕まえるかと
だんだんだんだん、山の中にお百姓さんは引っ張っていかれる。

500 メートルほど行ったとき、カラスが「カア、カア、カア」と三声鳴くと、
今まで倒れては〇〇き倒れては起きとったシカが、トッ、トッ、トーッと山へ飛んで入った。

「あっ、あっ、あ〜。な〜んだい。あんなに早く飛べるヤツが、なんでいままでヒョロついておった。
あ〜つまらない。あっ、なんだベトベトすると思ったら、
どこかでウシのクソを押さえてつけてやりたい、し〜え〜い。え〜え、まー仕方ない。
元のところに帰ってカメを持って帰りましょう」と思って帰ってみると、
置いてあったカメがない。ぷつり、ぷつり、ぷつり、ぷつり、また綱が切ってある。

お百姓さんは、「あら、だれか小学校の子どもかな。今日はオレの綱ば〜かり切って歩いて、
だ〜れが切ったんだ」と言うたが分からない。

池に帰ったカメ、池に帰ったネズミ、そこに飛んで帰ってきたシカ、
もうて舞い戻ってきたカラス。

足の一番速いものはだれです？・・・シカ。一番のろいものは？カメ。跳ね回るものは？カラス。
土の上を這いずり回っているのは？ネズミ。

みんな違うものが仲良く助け合ったのが、これがデモクラシーという。

今日、夕方おうちに帰ったらば

「お父さん、ちょっとそこへお座んなさい。デモクラシーとはどんなことですか？」

こう言うて、お父さんが「そんな面倒な難しいことはわからん」というたら、

「ボクが聞かせてあげよう。そこへお座んなさい」

このお話を聞かせてあげて下さい。

知恵のあるものもないものも、

考えの早いものものろいものも、互いに助けていくのでデモクラシーは行われるのであります。

これで私のお話はおしまいであります。さようなら。

【口演後の様子、司会者の言葉】

面白いお話でしたね、デモクラシーのお話。みなさんお喜びだったようですが、幼稚園のお友だちが先生へお礼の花束を差し上げるそうですから、どうぞ先生、お受け取り下さいませ。

お孫さんよりもまだちっちゃい幼稚園の皆さんの代表に花束をいただいて、先生、大変おうれしそうです。

今のお話は、私どもが今、日本のしるしに戴いております天皇陛下が皇太子様であられたときに、先生が皇太子様の前でお話をなさったときのお話です。

ですから私どもの天皇陛下は、デモクラシーのあの話を、皆さんと同じように小さいお子様のときに聞いて大きくなっていらっしゃるのです。

それでは先生のお話が済みましたから、これから北九州の、と申しましても小さいお子さんですから、小倉の幼稚園の方々が次々に日ごろ園でお勉強したお遊戯やお唱歌や、次々にこの舞台でいたしますが、小さいお子さんですから、どうぞひとつ、しくじってもみんなで元気をつけて最後までご覧くださるようお願いいたします。

■久留島武彦翁

久留島武彦は、明治7年、豊後森藩12代藩主の孫として現在の太分県玖珠町森に誕生しました。巖谷小波とともに、わが国の近代児童文化の礎を築いたことで知られ、口演童話や児童劇の開拓者でもあります。明治末期に、児童の社会教育機関としてお伽倶楽部を創設し、この全国普及にも努めました。童話ラジオ第1号も武彦の声によるもので、彼は書く童話作家よりも、話す童話作家の道を選びました。こどもの膝の前の友達になりたいと考え、大正期から亡くなる昭和30年代まで、盛んに全国を口演行脚しています。昭和35年没(享年86歳)。



■久留島武彦倶楽部

武彦翁の口演童話の素晴らしさを広めようと、太分県内外の研究者、歴史愛好家らが2007年5月に結成したボランティア組織。主宰は玖珠町在住の桑野英司氏。関係著作権者から著作物公開等に関する委任を受け、資料・情報の収集と公開に務めている。関連資料／情報をお持ちの方は、下記事務局へ

〒879-4413

太分県玖珠郡玖珠町塚脇「とんかつ東華」内 久留島武彦倶楽部

■オオイトデジタルブックとは

オオイトデジタルブックは、太分合同新聞社と学校法人別府大学が、太分の文化振興の一助となることを願って立ち上げたインターネット活用プロジェクト「NAN-NAN (なんなん)」の一環です。NAN-NANでは、太分の文化と歴史を伝承していくうえで重要な、さまざまな文書や資料をデジタル化して公開します。そして、読者からの指摘・追加情報を受けながら逐次、改訂して充実発展を図っていききたいと願っています。情報があれば、ぜひNAN-NAN事務局にお寄せください。

久留島武彦翁の口演：デモクラシーのお話（下）

2007年12月28日初版発行

編集 久留島武彦倶楽部

制作 川村正敏／別府大学メディア教育・研究センター地域連携部

発行 NAN-NAN事務局

〒870-8605 太分市府内町3-9-15 太分合同新聞社総合企画部内

©久留島武彦倶楽部